多読の効用性について

伊　藤　克　敏

数年前ジョージタウン大学での Round Table on Languages and Linguistics という学会に出席した折、インプット外国語習得論で知名の S.Krashen の講演を聴き、感銘をうけた。内容を簡単に紹介しておく。

外国語学習の初期の段階では音声による教師と学習者とのやり取り（interaction）が有効であるが、中級や上級の学習者には多量の「文字によるインプット」（print input）つまり読書が有効である、とし多読の効用に関する研究成果を紹介した。教師が指定する本を読ませる（assignd reading）よりは学習者が自分で選んだ本を楽しく読む（self-selected pleasure reading）方が効果的である。学習者が読みたくなるような雑誌や図書を豊富に揃えておくこと（print-rich environment）が重要である。

参考文献の展示場で求めた下記の本は Krashen の考えを知るのに参考になろう。

The Power of Reading : Insights from the Research. Libraries Unlimited,Inc.,1993.
（長倉美恵子・黒澤浩訳『読書のパワー』金の星社。ISBN4-323-01882-7）

筆者は１、２年生に夏休みなどに好きな本を２、３冊読んで、感想文をできるだけ英語で書かせているが、結構楽しんで読書したという報告が多い。また、時々、Reader's Digest や英字新聞の記事のコピーを読ませ、その感想文をできるだけ英語で書かせている。最近の学生は英語の語彙が貧弱で、英文を書く力に乏しい。多読の効用や感想文（book report）についての研究はかなり進んでいる。下記の文献からその一端が伺える。

門田修平・野呂忠司著
『英語リーディングの認知メカニズム』
（くろしお出版、2001、ISBN4-87424-216-2 C3081）

学生は外国語で話せるようになりたいというが、本当の語学力は多読によって豊かな表現を吸収し、それを文章に書く事によって豊かな語彙や表現力が培われるのである。ＩＴ時代の到来で外国語の文章能力がますます要求される。学生に多読をさせ、外国語で文章を書かせるようにしたいものである。